

# 第2次世界大戦後の西ドイツにおける 「アメリカ化」と消費生活の展開

— 1950年代の若者文化を中心に —

斎 藤 哲

---

## 《論文要旨》

第2次世界大戦後の西ドイツはアメリカの決定的な影響の下で、1950年代からほぼ20年の間に工業社会から消費社会への転換を遂げた。しかし、実はアメリカの与えた影響をその質と量の両面で正確に評価することは容易ではない。本稿はまず、(1)アメリカが戦後西ドイツ社会に及ぼした影響を評価するにはどのような視点があり得るかを検討し、ついで、(2)西ドイツのいわゆる「経済の奇跡」の中での若者文化、若者の消費行動の分析を通じて、アメリカの影響が西ドイツ社会にいかなる変化をもたらしたのかを探る。その際、主な題材とされるのは映画であり、またロックン・ロールの流行が持った意味が検討される。この検討を通じて、1960年代末頃までの間西ドイツでは社会秩序、家庭内の秩序、ジェンダー秩序等を巡って世代間の時に激しく、時に密やかな対立があり続けたことが明らかにされる。最後に、(3)アメリカの圧倒的な影響下にあったことがドイツのナショナル・アイデンティティの喪失を引き起こしたのかという問題が、1968年の学生運動までも展望しながら検討される。

キーワード：消費社会、若者文化、アメリカ化、映画、ジェンダー

---

20世紀の西ヨーロッパがアメリカの政治的、経済的、文化的な決定的影響下にあったことは言うまでもないが、とりわけ第2次世界大戦後の西ドイツではそれが顕著であった。しばしば戦後再建過程でのマーシャル・プラン

が引き合いに出されるが、その経済的な影響は実際にはさほど大きなものではなかったとしても<sup>(1)</sup>、戦後西ドイツの政治、経済、社会、文化の諸領域にアメリカが与えた影響の大きさは否定できない。とはいえ、アメリカの影響を質と量の両面から評価することは簡単ではない。

本稿では、まず(1)戦後西ドイツの発展にアメリカの及ぼした影響を評価するにはどのような視点をとることが出来るかという観点から、アメリカの及ぼした影響に関するこれまでの研究を概観し、ついで、(2)戦後の西ドイツ社会とアメリカとの関わりを、主に、1950～60年代の「経済の奇跡」による消費社会化の進展の中での若者文化に焦点を当てて検討し、アメリカの影響が西ドイツ社会にどのような変容を引き起こしたのかを考える。(3)最後にアメリカの圧倒的な影響下におかれたことが、(西)ドイツのナショナル・アイデンティティを失わせることになるのかという問題を、68年の学生運動をも展望しながら、戦後の父子関係に焦点を当てて考えてみたい。

## 第1節 「アメリカ化」、「アメリカニズム」とは何か

20世紀の世界におけるアメリカの圧倒的影響を表す言葉として「アメリカニズム」、「アメリカ化」という言葉がしばしば用いられる<sup>(2)</sup>。いずれもアメリカの圧倒的な政治的、経済的、技術的な、そして場合によっては文化的な優位に支えられた世界のあり方——それはまたしばしば「近代」(現代)と総称されるが——を表現している。だが、この二つの言葉の使い方には微妙な差異がある。主として戦間期に用いられることの多かった「アメリカニズム」がどちらかといえば静的に「近代」を意味しているとすれば、「アメリカ化」の方はアメリカの影響が及ぶ「近代」の動的な過程を意味している<sup>(3)</sup>。本稿は、両者の区別に留意しつつ、第2次世界大戦後のドイツ、特に西ドイツにおける「アメリカ化」の特徴を検討しようとするものであるが、

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

その際、「アメリカニズム」とか「アメリカ化」という言葉の厳密な定義付けをすることは避けたいと思う。ここではむしろ、これらの言葉が「アメリカ」と結びつく様々な現象、つまり自由民主主義的な政治秩序、自由主義的市場経済やそれらが形成されていく過程、社会の近代化とりわけ消費社会化、社会・経済生活におけるアメリカ的な方法の利用等々という現象を表象するものとして用いられていることを確認し、最近の研究においてこうした現象をめぐる議論がどのように取り上げられているのかを、戦後西ドイツの「アメリカ化」を中心に見ていきたい。

### 1. 「アメリカ化」はいつから始まったのか

以下の行論において「アメリカ化」とは、様々な意味と現象形態を持つ「アメリカ」のドイツへの流入および、ドイツ側でのその選択的受容、受容途上での「アメリカ」の変容の全過程をさすことにするが<sup>(4)</sup>、こうしたダイナミックなプロセスとしての「アメリカ化」は一体いつから始まったのであろうか。トクヴィルをまつまでもなく既に19世紀前半には、西ヨーロッパ人の意識の中にアメリカは一定の位置を占めていた。だが19世紀を通じてアメリカの影は次第に大きくなっていったとはいえ、ドイツ史の中でそれが決定的に重要となるのは比較的新しい。19/20世紀の転換期から1930年代までを戦後の歴史にとって意味のある「アメリカ化」の開始期と見ているのは、ポイケルトやリュトケである。例えばポイケルトは、工業化され、合理化された未来の原型として、ヴァイマル時代にアメリカが見られるようになったと論じている<sup>(5)</sup>。またA.リュトケらも「アメリカ化」に関する包括的論文集の「序論」で、ヴァイマル時代にアメリカは人々にとって「希望」でもあれば、「恐れ」でもあったが、第2次大戦後には端的にそこに己の将来の姿を読み取ることができる存在となったと述べている<sup>(6)</sup>。

世紀転換期から1930年代までを「アメリカ化」への転機とするこのよう

な見方の根底にあるのは、合理化された工業がもたらしたドイツ人の全般的な生活水準の向上ということであった。もちろん第2帝政期に比べるならば、一般的にはヴァイマル期の労働者や都市中間層の生活水準の向上は否定できないにせよ、それを果たして「アメリカ化」と呼べるかどうかについては異論のあるところではある<sup>(7)</sup>。アメリカに比較した場合のドイツの消費水準の低さは否定しようもなかったからである。それでもとにかく、ヴァイマル時代にはアメリカに関わることは「アメリカニズム」という言葉で表現され、それはしばしば合理化をめぐる議論として展開された。その際、含意されていたのは特定分野<sup>(8)</sup>で働く女性にとっては重大な意味を有していたような事務職の合理化＝労働の分割などではなく、主に工場生産の合理化とりわけフォード的大量生産ということであった。従ってまた、それは男性労働者の労働現場に関わる問題であった。ここで想定されていたのは、合理化が生活の質的向上を可能にするということであった。つまり男性を中心とした工業での合理化や大量生産によって生産性が向上するならば、労使間の分配をめぐる対立は緩和され、それに伴って労働者の生活水準が向上し、主として労働者の低い生活水準に起因する諸々の社会問題も解決されていくであろうと考えられたのである<sup>(9)</sup>。このように、ヴァイマル時代にはフォード的＝アメリカ的大量生産方式はあらゆる社会問題を解決するための、魔法の鍵であった。容易に見て取れるように、こうした考え方はそれを展開するものの願望を反映していた。つまり、アメリカ像はドイツの現実の状況の中から生まれた経験によって作られていたのである<sup>(10)</sup>。そしてまた、このような考え方が労働運動、特に労働運動の主流をなしていた自由労働組合に顕著であったことも注意されて良いだろう<sup>(11)</sup>。何故なら、生活水準が向上するならば社会問題も解決されるであろうという考え方の中には、人々の生活のあり方を特徴づけるのが生産ではなく消費であるということ、生産を中心とする工業社会から消費を中心とする消費社会への転換は工業社会の発達の上に初めて可能になる

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

ということが、はっきりと現れているからである。こうした考え方がヴァイマル時代に工業社会の担い手である労働者の組合のなかに浸透したことは、第2次世界大戦後に生じる「労働者階級の消滅」といわれる事態が労働者自身によっても作り出されていったことを示唆しているだろう<sup>(12)</sup>。

以上のようにフォーディズムがもてはやされたのと同じ時期に、「家事の合理化」ということがドイツ主婦連盟などによって推進されていた<sup>(13)</sup>。それは一方でドイツのブルジョワ女性運動の延長線上にあるとともに、他方では家事労働が機械化・合理化されていると思われた「アメリカ式の家庭」の実現を目指していた。それでは、この家事合理化論と生産合理化論とはどのような関係にあったのか。重要なことは、フォーディズム的大量生産による生産性の向上、それを前提とした社会問題の解決なくしては、機械化された、つまり工業製品に囲まれ「主婦の楽園または天国」とみなされた「アメリカ式の家庭」は実現し得ないことであった。ここにはヴァイマル時代における合理化論が、労働過程の合理化、家事の合理化等、いろいろな分野において論じられていたにせよ、その総体においてもっているジェンダー的な性格が現れているだろう。つまり、全体としての合理化論にあっては、家庭外の労働過程が男性に、家庭生活特に家事が女性に、それぞれ割り当てられているのである。ただし、これまでの研究では合理化を社会全体に貫徹する過程と捉えて、そのジェンダー的性格を議論するのではなく、個別領域での合理化論のもつジェンダー的性格が述べられるに止まっている<sup>(14)</sup>。以上をまとめるならば、世紀転換期から1930年代までをドイツにおける「アメリカ化」の転機とみなしてきたこれまでの研究にあっては、「アメリカ化」に内在するジェンダー化された性格が十分に把握されていなかったと言えるだろう。

アメリカに関するヴァイマル時代の議論に現れたもう一つの特徴は、合理化による社会問題の解決ということ言われても、アメリカ的自由民主主義的政治秩序についての肯定的な議論がなかったことであるといわれる<sup>(15)</sup>。こ

の点は、民主化が逃れることのできない課題となった第2次世界大戦後の議論と、決定的に異なるところであるが、恐らくその背後にはヴァイマル時代に広くみられたいわゆる「ウィルソンの講和」への反発があったと考えられる。いずれにせよ、ここにはヴァイマル時代の「アメリカ」受容の一つの特徴が現れていると言えよう。つまり経済や技術に関わる「合理化」は受け入れつつ、政治、あるいはそれを含む広い意味での文化を拒否するアンビヴァレントな姿勢である<sup>(16)</sup>。

## 2. 第2次世界大戦後

第2次世界大戦に敗れたドイツは東西に分裂し、冷戦の最前線国家としてそれぞれ西側アメリカ圏と東側ソ連圏のなかに組み込まれることになった。これによって西ドイツに対するアメリカの影響力は確実なものとなったとはいえ、影響が拡大し、浸透するプロセスは決して単純ではない。デーリング＝マントイフェルはアメリカの影響力が西ドイツ社会に及ぶプロセスの特徴を、ヨーロッパ（＝ドイツ）へのアメリカの影響と前者の後者への影響という二重のプロセスとして捉えている。後述するようにデーリング＝マントイフェルによれば、この二重のプロセスの中に成立するのは「西欧化」という事態なのであり、単純に「アメリカ化」として概括することはできないのである。確かに、ここでヨーロッパに対するアメリカの影響は「アメリカ化」という言葉で表現され、それはアメリカに発するインパクトにより経済・政治・社会の諸領域で上から下に向けて生ずる変化を指している。その変化の過程が広い意味での文化の変容を伴うことはいうまでもない<sup>(17)</sup>。だが、文化変容を含むこの広範な変化、「アメリカ化」はドイツの側からの何らかの作用なしには生じない。換言すれば、アメリカの影響とその結果を例えば「アメリカ化」即「近代化」などと単純化して捉えることはできず、アメリカの影響はドイツ社会の中で屈折し、変容し、ある場合には抵抗を受けるということで

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

ある。例えば、アメリカによる戦後西ドイツの「民主化」の試みに対して、ドイツ側の戦後構想は社会民主党についてはいうまでもなく、「オールド自由主義」を唱えたキリスト教民主同盟にしてもともに、ヴァイマル時代に根ざした民主化構想を提示していただろう。また A. シルトによれば、1950年代には教育や青少年政策などの面で特に強くドイツ的伝統を再建しようとする動きが、政治的、社会的に強かったとされる<sup>(18)</sup>。このようにアメリカの影響に対するドイツ側からの反作用がアメリカの影響を「西欧化」するのである。

アメリカの及ぼす影響をめぐるこの複雑なプロセスの中で、西ドイツ社会は1950年代と60年代を通じて大きく変化し、それによって階級対立とヒエラルヒーの階層秩序を特徴とするような階級的—工業社会から、諸個人の生活スタイルと生活状況が著しく個別化し、多様化した新しい社会<sup>(19)</sup>へと移行した。西ドイツに対するアメリカの影響の拡大と深化は社会のこうした根底的な変化と関連づけて捉えられねばならない。

さて、新しい社会の確立が1970年代であるとすれば、50年代以降とりわけ60年代はまさにこの新しい社会の前史であり、50年代以前と新しい社会とを分かť分水嶺となる時期であった<sup>(20)</sup>。そして、例えばデーリング＝マントイフェルは新しい社会への移行を「西欧化」と呼び、「アメリカ化」とは区別している。元来「西欧化」とは、18世紀の啓蒙主義の拡大に端を発していたが、狭くは冷戦の中で「西側」がアメリカと西ヨーロッパの共通の文化的価値、政治的な価値、経済的秩序を基礎に「東側」に自らを対置していくプロセスをさす<sup>(21)</sup>。だがその過程でアメリカの影響は変容をとげ、「西欧化」されて「東側」に対置されるのであり、この時「西欧的」なものは「アメリカ的」なものと、より自覚的に区別されることになる。60年代以降の西ドイツについていえば、アメリカの政治的・経済的・文化的な強い影響の下でドイツが「西側」の一国として「東側」と対決しようとする時、その姿勢はドイツの「民主的伝統」を踏まえ、ナチズム犯罪に関わる「過去の克

服」を果たしつつ、戦後社会の近代化の中で、西欧の一国となろうとする志向性となって現われてくるだろう。そしてそのような志向性を「西欧化」と見るべきであろう<sup>(22)</sup>。その中でアメリカの影響も変容を遂げていくのである<sup>(23)</sup>。

ところで、上に述べた新しい社会の重要な側面は、アメリカ文化の圧倒的な流入の中で、——それは決してドイツの伝統的な価値観や行動規範を消し去るものではなかったとはいえ——社会階級や階層の違いを超えた大衆文化がしばしばアメリカ的生活様式の拡大と意識され、定着したことであった。階級的—工業社会の文化がミリューに規定されていたことはよく知られているが、そうした文化から大衆文化への変化が消費社会化の重要な側面をなしていることはいうまでもない。だが階級的文化から大衆文化への移行過程に、どのような問題が生まれてくるのか、戦後ドイツの場合にそこにどのような特徴があったのか——まさにこの問題こそ、アメリカ文化の受容と変容という「アメリカ化」の過程が持つ意味合いを明らかにするだろう。このように考えるとき、戦後ドイツにおける「アメリカ化」についての研究の一つの焦点が、若者文化に置かれるのはある意味では当然であろう<sup>(24)</sup>。何故なら、消費社会化の中での大衆文化の主要な担い手の一人は若者だからである。

## 第2節 映画と若者文化——1950年代を中心に——

敗戦国ドイツの非ナチ化・民主化が、東西いずれにおいても不徹底であり、多くの問題を孕んでいたことはよく知られている。だが西ドイツの場合、如何に過去との断絶が不徹底にしか行われなかったにせよ、逆説的にも、そのことが西ドイツにおける民主主義の定着を助け、人々が1950年代以降の経済成長、いわゆる「経済の奇跡」の成果を享受することを可能にしたとも言えるのである<sup>(25)</sup>。



## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

ここでは1950年代に進展した西ドイツの消費社会化が若者に与えたインパクトに注目し、それが過去との不徹底な断絶とどのような関わりを持ったのかを検討しよう。消費社会化はアメリカの圧倒的影響下に進展したから、この問題は「アメリカ」を受容することがドイツという土壌でどのような変容を遂げていくかということを考える上での、重要なヒントとなるであろう。また1950年代の社会を取り上げるのは、それが60年代に比べてはるかに「過去」<sup>(26)</sup>の社会に類似しているからである。他の西ヨーロッパ諸国と同じく西ドイツも1950年代後半から、石油ショックで大打撃を受ける1973年までの間に「豊かな社会」を作り上げた。言い換えれば、「過去」との決別がこの間に生じたのである。今日の眼で振り返ってみるならば、この時期はおそらく「永遠に続くと思われた繁栄の泡沫の夢」(Burkart Lutz)にすぎなかったであろうが、そこに生じた変化はそれでも巨大なものであった。変化はすべての階級と世代の男女を襲ったが、変化の影響をもっとも強く受けたのが若者であった。従って我々は若者に焦点を当てることで、この「夢」の時代にドイツ社会に生じた変化とその意味について理解することができるだろう。

ここで我々が検討の材料とするのは映画とロックン・ロールである。映画は大衆消費社会における余暇の重要な素材であり、とりわけ1950年代半ばには若者の社交の手段としてもっとも人気のあるものであったからである<sup>(27)</sup>。また後者はその爆発的流行が社会に与えたインパクトの故に、考察に値するのである。

### 1. 50年代ドイツ映画の表現するもの

#### (a) 戦争映画と「郷土映画」

アデナウアーの下でのナチズム的過去との不徹底な断絶は、確かに戦後西ドイツの政治秩序への人々の統合を容易にする側面があったことは否定でき

ない。しかしそれでも他方では、過去との曖昧な関係は当時の人々に一種の居心地の悪さを感じさせてもいた。戦後西ドイツ社会を公的事柄への無関心、政治からの逃避、私生活への没入等々という状態が覆っていたように見えたのは、そうした曖昧な関係を忘れ、ナチズムとその犯罪行為から目を背けたいとする願望が大きく広がっていたからに他ならない。映画は人々のそのような気持ちに対応する消費の手段であったのである<sup>(28)</sup>。よく知られているように、かつてドイツはアメリカと並ぶ映画産業の中心地であった。西ドイツでは占領が終わると一時期、ドイツ映画はアメリカ映画や他のヨーロッパ映画を凌ぐ人気を博したのである。

代表的なジャンルの一つは戦争映画であったが、その中ではドイツの行った戦争とその結果についてのドイツ人の責任を問うことはなされず、義務に忠実な兵士が無謀な命令の犠牲になるというような、個人の英雄的行為を強調する描き方がなされた。ある小部隊の開戦前の兵営生活から敗戦直後の捕虜収容所生活までを描いた『08/15』シリーズ3部作（P. マイ監督、1955～56年）はその代表的なものである。ここではナチズム犯罪は一部の人間の犯した罪として扱われ、総体としてのナチズム支配と戦争は無害化されている。今日でもドイツが行った戦争についての『08/15』的な描き方は、例えば『Uボート』（W. ペーターゼン監督、1982年）などに受け継がれている。他方、56年には優れた反戦映画『橋』（監督 W. ヴィッキ）が制作されている。ただ注意されねばならないのは、『橋』の場合でもまだ多分に国防軍についての『08/15』的な捉え方も見られることである。このことはナチ支配と戦争とを無害化しようとする志向が如何に根強かったかをこの上もなくははっきりと示していたと言えよう<sup>(29)</sup>。このように戦争を無害化する限り、ある場合には戦争は思い出として人々の物語の対象となるのであり、そこでは過去との不徹底な断絶というようなことが問題視されることも最早ないだろう。戦争映画が「過去の克服」に関わる居心地の悪さを解消する手段となっ

た所以である<sup>(30)</sup>。

このような戦争映画とならんで好まれたもう一つのジャンルはドイツ映画に伝統的な「郷土映画」(Heimatfilm)であり、1950年代前半に大当たりをしていた<sup>(31)</sup>。ドイツにおける「郷土」とは風景、言葉、習慣、伝統と結びついた一定の地域を表す観念であり、人々の帰るべきところである。それは絶えざる変化の中にある現代にあって唯一変わることのない古里であった。ナチズムは「郷土」の観念に含まれるこのような反近代主義的な側面を強調し、そのことが都市にあこがれと不信という相矛盾する念を抱いていた地方の人々や、近代化過程の中で没落の不安におびえる人々を捉えていた。それだけではなく、政権掌握直後のナチズムは「郷土保存」を様々な形で演出したり、ヴァイマル時代からあった右翼的な郷土防衛運動を引き継いで、力を用いて古里を防衛することを制度化した。そして第2次世界大戦を開始することで、東方に新しい古里(「生存圏」)を作ることをも試みたのである。だがドイツの敗戦とともに、この生存権構想も破砕してしまったことはいうまでもない。

そこで、戦後に「郷土」の観念が改めてもちだされてきたときに前面に押し出されたのは、この古里が戦いとは無縁な「場」であるということであった。「祖国」が男性によって象徴されるのに対して、「郷土」は常に「母」のイメージをもって表された。1950年代の西ドイツは、戦争末期から戦後にかけて東ヨーロッパやソ連占領地区＝東ドイツから逃げ込んできた多くの人々を抱える社会であったが、その人々の帰るべき場所として、新たな「故郷」の感情を提供したのが「郷土」であった。映画はそのような「郷土」を可視化したのである<sup>(32)</sup>。「郷土」は戦いに敗れ荒廃した「祖国」に代わる人々の故郷であり、ナチス・ドイツの犯した罪過とは無縁の場所であった。ドイツにはまだ美しく、誇るべき、そしてまた救いを求めて逃げ込むことができる場所、すなわち「郷土」があると、人々に安心感を与えるような場所であっ

た。人々は自ら背負ってきた過去が何であれ、「郷土」から新たな出発をすることができるのである。それ故、「郷土映画」に逃げ込むことができる限りは、人は過去の罪過を免れることができた。それはドイツの過去の罪過をあっさりと投げ捨てることを許すものであったのである<sup>(33)</sup>。

「田舎」の光景を描き、ナチ時代などなかったかのように、伝統的な男女や親子の関係、家庭内の秩序の美しさを繰り返し述べる「郷土映画」は、過去に終止符を打とうとする人々の気持ちを反映するものであった。1951年に大ヒットした、リューネブルク地方を舞台にした『ヒースは緑』(H. デッペ監督)という作品では、そもそもナチス時代について語られるところがないといわれる<sup>(34)</sup>。

#### (b) 若者世代と親世代のズレ(1)——兵役を巡って——

それでは一体何故このような映画が生まれたのであろうか。我々が確認しておく必要があるのは、これまで述べてきた通り、これらの映画がナチズム支配を無害化し、過去に終止符を打とうとする人々の気持ちの表現であり、「過去の克服」を「真に罪のある人間」のみを処罰することで、その影響を最小限にとどめようとするアデナウアー政権の方針にも合致するものであったことである。また伝統的な秩序観、価値観を戦後再建の精神的な基礎としようとした時代的な要請にもあっていた。そのような要請は具体的には、例えば1954年の家族問題省の設置に表現されるような、法的な結婚に基づく男女とその間に生まれた子供からなる家族を「正当な」家族と見なす伝統的家族観の復活となって現れた。「郷土映画」は、「男性＝夫＝父親」が一家の大黒柱であり、「女性＝妻＝母親」は家庭の運営(＝再生産)に責任を負うという伝統的な性差役割区分を基礎とする家庭の像を映し出していたが、それは法的家族観同様、家庭におけるジェンダー秩序の現実と鋭く対立するものであった。なぜなら、戦争の結果、多くの家庭では夫、父親あるいは男性

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

を失い、また戦中と戦後を通じて女性が一家の大黒柱であることは珍しくはなかったからである。だが、伝統的家族が危機に瀕しているからこそ、その再建に戦後再建の行方がかけられることにもなったのである。

戦争映画や「郷土映画」が作られ、それらが受け入れられていった背景にはこうした事情があったとはいえ、当時の西ドイツの精神的状況をこのことだけに収斂させてはならないだろう。何故なら、こうした事情とは相容れない新しい問題も生じていたからである。

その問題とは若者たちと親世代との間にある重大なズレが生じてきたことである。そのズレは、アメリカの影響の下で西ドイツが西側同盟に組み込まれ、また経済的にも世界経済の中に再統合されていくような戦後西ドイツの「アメリカ化」、「西欧化」の過程そのものに関わっていた。具体的には、再軍備に関連して直ちに問題となるような軍事的な価値や、消費行動のあり方をめぐって、若者たちとその親世代との間の意識と行動に関わるズレが次第に表面化していたことであった。しかもそのズレはドイツの過去の罪過とも関連していた。映画は多様な意味を持った世代間のズレを埋めようとするものでもあった。では、1950年代の戦争映画や「郷土映画」はそれに成功したのであるか？

答えは否である。戦争映画や「郷土映画」が人気を博していた1950年代半ばには、ドイツでもすでに西部劇をはじめとするアメリカ映画が多くの人々、とりわけ若者の心を掴んでいた。彼らは「郷土映画」や戦争映画の中に一種の胡散臭さを感じていたのである。例えば、『08/15』シリーズの大ヒットは「命令は命令である、規則は規則である」という官憲国家的な意識が人々の間に強固に残っていることを示していた。あるいは「郷土映画」の多くは若い男女の恋愛にこと寄せながら、伝統的な男女や親子の関係、家庭内の秩序の美しさを繰り返し述べていたが、それがあるべき秩序を描いているという点では戦争映画と同断であった。まさにそうであるからこそ、14歳から

25歳前後までの若者たちはこれらの映画の中に権威主義的な親世代の圧力やナチス時代と変わらぬ精神的状況をみていたのである。とりわけ、占領期にかつてのドイツ兵とは対照的に開放的なアメリカ兵と接触した経験を持つものにとっては<sup>(36)</sup>、このことはより一層のこと強く感じられたことであろう。因みに1950年代半ばにこの年代であった若者たちはヒトラー・ユーゲント世代か、あるいは戦後になって社会化を経験しはじめた世代である。「経済の奇跡」の中での若者文化、若者の消費文化の中心的な担い手となるのは、後述するように、これら若者のうちでも比較的若い方の年代に属する若者たちであった。戦争映画に胡散臭さを感じ、そこにナチス時代と変わらぬ精神状況を見いだした若者たちと親世代とのズレは、折からのドイツの再軍備を巡る意見の中に鮮明に現れた。

戦争映画がヒットした1950年代半ばは東西両ドイツが軍事的にもそれ以前にもまして東西両陣営に深く組み込まれていった時期であった。その端的な表れが1956年の西ドイツにおける徴兵制の導入であり、東ドイツにおける国家人民軍(NVA)の創設であった。東西両ドイツが軍事化を進める中で求められた兵士像と軍隊像は、確かにもはや軍国主義的なそれではありえなかった。しかしそれでも例えば西ドイツ連邦軍の場合、かつてのドイツの軍隊に備わっていたとされる勇敢で命令に服従する兵士や、軍事的な効率性を最大限に受け継ぐものでなければならないとされた<sup>(37)</sup>。そうであるならば、例えば映画『08/15』に登場する義務に忠実で勇敢な兵士は、将来の西ドイツを形成する人間のモデルとなるはずのものであった。なぜなら、徴兵制による国民皆兵制度の下では兵士＝国民だからである。確かに西ドイツ連邦軍の兵士については「制服を着た市民」という位置づけがなされており、政党に所属する権利、犯罪的な命令を拒否する権利等が与えられていた。このことは西ドイツが伝統的な、軍事優先の権威主義的な国家ではなく、民主的な国家となったということの重要な一面ではあった。従って、『08/15』的兵士

が将来の西ドイツを構成する人間のモデルであったとしても、そのことは必ずしも戦後民主主義を否定するとは限らないだろう。だが、このような建前と西ドイツ国民が示した現実の意識との間には乖離があった。

1956年の徴兵制導入について行われた世論調査によると、徴兵制に関する成人の意見は賛否がほぼ半々に2分していたが、18歳から29歳までの若い層では半数を超える回答者が徴兵制ではなく志願兵制を支持していた。徴兵制を支持したのは圧倒的に60歳以上の年長者であった。他方約60%の人は若者の規律化のためには兵役が有効であると考えていたが、17～29歳の層では否定的意見の方が多数を占めていた。注目すべきはこの問いに対して45～59歳の女性の70%が肯定的に答えていたことである<sup>(38)</sup>。こうした数字からは明らかに規律それ自体が肯定的に評価されていたことを読み取れるだろう。この当時の婦人雑誌をみると、十代の若者を不安げに取り上げている記事がしばしば目につくが、そこでは一方で、彼ら若者たちが「親の世代の知っていたような理想をもたない」こと、「古い世代の世界像を受け継ぐことを拒否」していること、「飽くなき欲求充足」を求めること、「熱意と持続力に欠けること」などの点で叱責され<sup>(39)</sup>、他方では、父親のいない家庭が多いことが若い世代にそうした欠点を持たせることになるとするような議論が少なくなかった<sup>(40)</sup>。明らかに若者世代の消費性向への親世代の不安や不満が、兵役を通じた若者の規律化への叫びとなって現れていたのである。また戦争の結果に他ならない父親不在の家庭が欠損家庭と見なされ、若者の規律化ということで実はこうした家庭自体を差別化していく見方が、ここには潜んでいただろう。いずれにせよ、親世代には総じて若い世代に対して何らかの規律化が必要であるとする見解がみられたのである。またベルリンの教員団体は、生徒に対し最後の手段としては「平手打ち」もやむなしとする見解を表明し、婦人雑誌の読者にもそれを支持するものが圧倒的に多かった<sup>(41)</sup>。このように暴力的手段までも含めての若者への規律化に対する要求が親世代に強

いとき、彼らが兵役をも規律化の一手段として理解していたとしても不思議ではない。我々はこのような考え方のうちに、権威のあり方を問う原理として民主主義を捉える志向性の弱さを見て取ることができるだろう。アデナウアーの下で出発したボン民主政治がまずは議会制民主主義の定着を第一とし、例えば社会生活面での民主化が日程に上ってくるのがようやく1960年代末であることと、このことは対応している。

ところで注意しなければならないのは、兵役に関する若い世代の反応である。30歳以下の男性では徴兵そのものを拒否する意見が多数を占め、18～29歳では兵役を規律化の手段として捉えることへの反対が多数派であった<sup>(42)</sup>。この世代の多くはヒトラーユーゲントや場合によっては兵役の体験を通じて、規律のなんたるかを身をもって知っていたのである。このように、兵役を巡っては明らかに世代による理解の顕著な相違が存在していた。そして、まさにそうした相違こそが、戦争映画が広く受け入れられていく中で、若い世代にあってはそれを胡散臭く感じさせることにもなったのである。

#### (c) 若者世代と親世代のズレ(2) — 家庭の秩序 —

兵役を巡って若者世代と親世代のズレが顕在化し、それはまた戦争映画への受け止め方の差ともなって現れたが、若者世代が親世代に反発したもう一つの問題は家庭のあり方であった。戦後の再建は、社会的には父親を「一家の大黒柱」とするような、性差役割分業に基づく家族の再建を基礎としていた。そこでは、男性は一家の大黒柱と位置づけられて主たる役割が割り当てられたのに対して、女性は主婦、母としてのみその役割が認められるような従属的な存在とされた。この事態は1958年に、民法改正を含む一連の法律の改正や制定によってようやく、基本法に盛り込まれた男女同権が認められ、その結果、夫の同意なしで妻が家庭外に就労することが可能になっても変わらなかった。妻の就労には「家庭内でのその義務」を侵さない限りで、とい



う条件が付けられていたからである。

しかし言うまでもなく、ここに述べられたような家族のあり方は制度としてのあるべき家族の姿であり、そのまま現実の家族であったと見なすべきではない。特に、このようなあるべき家族の再建に国家の再建をかけようとした人々にとって問題であったのは、戦争未亡人や未婚の母が中心となっている家族であり、それはいわば敗戦国ドイツの負の遺産であった<sup>(43)</sup>。また仮に夫婦と子供のいわゆる完全家族の場合でも、戦時中から戦後にかけての経験の結果として、男性の脱男性化、女性の男性化とも言うべき状態が珍しくはなかった。少なからぬ家庭で、家族の生活一切に責任を負ったのは、男性ではなく女性であったからである。あるいはまた、復員して疲弊しきった男性に全てを任せるわけにはいかなかったからである。そうした経験が女性に自信を与える場合も少なくなかった。「戦後強くなったのは女と靴下」というのは我が国だけのことではなかったのである。

このような状態に一定の変化が生じたのは50年代の経済発展の中でのことである。政府が期待したような家父長的な家族に基礎おいた社会がそこに現出したように見えたからである。1950年代後半の商品広告を見ると、「頼りになる」夫ないしは父親を中心とする家庭を描いたものも少なくなかったことが、そのことを物語っている<sup>(44)</sup>。だが、戦後の「経済の奇跡」における消費生活の発展に着目するとき、広告にみられるような像は仮象でしかなかっただろう。夫が一家の大黒柱たり得る条件は非常に限定されていたからである。経済的にみれば、その条件はいわゆる家族賃金が文字通りの意味で与えられ、家族がそれで生活できる場合であった。つまりそれは、夫の収入をもって経済の発展のもたらす利益に与ることのできる場合だけであり、その意味で男性の「男性」性は、その収入によって限界づけられていたのである。

そればかりではなく、家庭内に目をやれば、その収入をどのような形で使うかを決定するのは女性＝妻＝母であった。何故なら「経済の奇跡」は、個

人消費のレベルで見ると、各家庭に家電製品や家具、自家用車等の耐久消費財が普及することを意味していたが、家庭が女性の場合に限れば、耐久消費財の購入とその使用の仕方を決定するのは女性＝妻＝母たがざるを得なかったからである。まして、十分な収入を得ることができないまま、戦前のように家庭内の決定権者として男性が振る舞おうとするとき——1957年には法的にも男性のそうした権利は消失していたから——家庭内の夫婦の関係はしばしば非常に悪化することは避けられそうになかった。こうして、男性は家庭の内部において、法的な意味ばかりではなく、実質的な意味でも決定権者の位置を失いつつあったのである。先に挙げた広告の例は現実を反映しているのではなく、あるべき家族、夫婦の関係を描き出していたと言うべきであろう。

なお、家庭が経済の発展に与かり、物質的に豊かな、耐久消費財に囲まれた「アメリカ」的な生活を享受するのは、総じてその家庭が夫婦を基礎としている場合であって、寡婦や未婚の独身女性を中心とする家庭の多くは、「経済の奇跡」から取り残されるか、わずかしきその恩恵に浴せなかったのである。しかも、1956年以降のソ連からの捕虜の帰還も含め、多くの家庭で夫、父親が戻ってくるにつれて、男性不在の、女性を中心となっている家庭は「正常」ならざる家庭、「不正規な」家庭として社会的にも無視され、差別されるようになっていった。そうした事態にヴェルメリングの家族問題省が果たした役割が大きかったことはいうまでもない<sup>(45)</sup>。こうしたことから、社会全体が「平準化」していくという「経済の奇跡」の中でもてはやされたショルスキの議論には、重大な欠陥があっただろう。

父親の権威を弱める条件は、以上述べたことだけではなかった。戦後の民主化の中で、ドイツ労働運動の伝統的な特徴であった階級闘争的な労働組合運動は、アメリカやイギリスの労働運動の影響を受けて階級協調運動へと変質<sup>(46)</sup>、また50年代半ば以降社会民主党も階級闘争路線を放棄して「国民

政党」へと変身したとき、かつては可能であった政治の場において男性の主体性を発揮する道も狭くならざるを得なかった。つまり、男性労働者が階級闘争の戦闘的な担い手であるというイメージは、最早、現実にはそぐわなくなっていたのである。こうして、男性は「大黒柱」というイデオロギーとは裏腹に、政治的にも経済的にも、あるいは家庭の外でも内でも、「男性」=主体であると言い難くなっていたのである。

ここに述べたようなジェンダー秩序の揺らぎは、「経済の奇跡」の中で、消費生活の向上をなかなか果たすことの出来ない家庭ほど顕著となる傾向にあったことは、容易に理解できるところである。もちろん「経済の奇跡」の恩恵に十分に浴している場合でも、父親はなお伝統的な権威主義的な態度を容易に崩そうとはしなかった。それは例えば、父親が息子に道具の使い方をはじめとする様々な「技術」を伝えることで、維持された。だが、かつてのように父親の権威が公権力によって担保される度合いは非常に弱まっていたから、父親の権威主義的な態度も早晩、崩れ去る運命にあったといえよう。とりわけ、夫=「大黒柱」の収入だけでは、家族が「経済の奇跡」のもたらす利益に与けられないところでは、父親の権威の崩壊が顕著とならざるを得なかったのである。

このように戦後社会において、家庭内でのジェンダー秩序は特に消費社会の進展との関連で大きく揺らぎ、それに伴って父親の家父長的な権威を主張できる余地も狭まっていた。ここで再び映画の話にもどるならば、前項でとり上げた「郷土映画」はあたかもそうした現実などないかのごとく作品であった。1950年代半ばは家庭の消費生活が、明白に耐久消費財の購入に方向付けられ始めた時期であるが、そこには夫婦、親子などの間の様々な緊張が伴っていた。そうであるからこそ、まさにその時期を境に、現実との接点を失っているかに見える「郷土映画」に代表されるドイツ映画から、様々なジャンルのアメリカ映画へとドイツ人の、とりわけ若者の嗜好が変わるの

は決して偶然ではなかったのである。

## 2. 「経済の奇跡」と「不良」——アメリカ映画と若者文化——

これまで繰り返し述べてきたように、家庭生活のレベルで言えば、「経済の奇跡」は家庭の収入増加と耐久消費財の普及として現れた。同時に、これもよく知られていることであるが、衣料品産業やレコード産業さらには映画産業等にとって、若者向け市場がきわめて重要な意味を持つようになった。今や若者たちはジーンズ、革ジャンパー、セーター、Tシャツを着用し、ポータブルラジオやポータブル・レコードプレーヤーあるいはカメラを持つことや、オートバイやスクーターを乗り回す生活を夢見たり、実際にそうしたのである<sup>(47)</sup> (写真1参照)。だが、耐久消費財を購入するためには節約を不可欠とせざるを得ない家庭がまだ多かった状況では、このような若者向け消費市場の成立とそこでの若者の消費行動は、例えば家庭内での親子の軋轢を生み出し、若者の消費行動や生活スタイルを巡る多くの議論を生み出すことに



写真1 若者<sup>(49)</sup>

もなった。とりわけ保守派は若者の消費行動のなかに彼らの精神的な墮落現象を見いだしていた<sup>(48)</sup>。写真1のようにタバコを吸うことさえもが「逸脱行動」へのきっかけとなると見なされることが少なくなかったが、そうした「逸脱」を体現していたのが「不良」(Halbstarke)と呼ばれた若者の存在であり、特に1956～57年に彼らは社会問題化するのである。言うまでもなく、「不良」と目された若者たちは、若者の行動、特にその消費に関わる行動を規制しようとする側からみて「逸脱行動」を行う

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

存在なのであり、言葉の常識的な意味での犯罪行動を繰り返す本来の不良であるとは限らないのである。むしろ、「不良」というレッテルによって「正常」と「逸脱」とを区分し、若者を「正常」な市民への馴致しようとする意図をここにみておく必要があるだろう。この項と次項ではこうしたことを背景に、アメリカ映画やロックン・ロールが西ドイツ社会でどのように受け止められたのかということ为例に、1950年代後半から60年代初頭の若者文化、特に若者の消費行動について検討しよう。

1950年代の半ば、我が国でもそうであったように、一連のアメリカ映画がドイツでも大ヒットした。なかでも、シドニー・ポワチエの『暴力教室』、ジェームス・ディーンの『理由なき反抗』、エルヴィス・プレスリーの『監獄ロック』などは、西ドイツばかりではなく東ドイツでも多くの若者を惹きつけた。とりわけ物議を醸したのはマーロン・ブランド主演の『乱暴者』であった。この映画に影響された若者たちが西ドイツ各地で「騒動」を起こし、それは東ドイツのロストックにまで及んだのである。1956年4月から1958年末までに西ベルリンを含む西ドイツ各地でおよそ100回の「騒動」が起きたが、規模の大きなものでも参加者は100名程度であった<sup>(50)</sup>。もっとも、「騒動」を期待しての野次馬も多く、若者の「騒動」、特にその中心的な参加者と目された「不良」に社会的な注目が集まることになった。56年10月25日に連邦議会で内務大臣 G. シュレーダーは若者の問題に関連して政府の方針を説明し、「将来の計画に関連して若者向けの余暇の施設（を充実させること）が重要である」と述べた。続いて、議会は保守政党キリスト教民主同盟・社会同盟の提案に基づき、青少年保護法の改正を決議したが、そこではとりわけ若者を「不適切な映画」から守ることが謳われたのである<sup>(51)</sup>。ここには、「不良」に代表される若者の行動、特にその余暇に関わる行動が、従って彼らの消費行動が親世代から不信の念を持ってみられていたことが、はっきりと現れているだろう。そして若者の余暇や消費行動が「不適切な」アメ

リカ映画に触発されたものであると理解されているとするならば、ここにはドイツ社会へのアメリカの影響に対する不安や不信の念が保守的な親世代の中に潜んでいたことが現われているだろう。

「不良」と目された若者たち（写真2参照）の「騒動」は、ジャーナリスティックな意味では大きく注目されたとはいえ、上に述べた数字からも分かるように、その規模や広がりとは決して大きくはなかった。上述の映画に熱狂した多くの若者は決して「不良」ではなかったのである。だが、若者の規律化のためには兵役が有効であるという意見が多数を占め、また特に父親のいない家庭が多いことが若者たちに理想や熱意、持続力を失わせ、消費に走らせることになるとして、若者の規律化のために「父親の権威」が必要であることを事実上主張するような議論が横行する中では、当然、「不良」と彼らによる「騒動」も、容易に若者一般の性行へと還元され、「騒動」を含む彼らの行動の原因もまた「権威を維持するものとしての」父親の不在に帰せられることになった<sup>(52)</sup>。例えば当時のあるラジオニュースは、「騒動」を起こす「不良」の数は少ないということとともに、「不良」の多くは父親のいない家庭に育っているという EMNID 世論研究所の調査結果を紹介している。これによって「不良」が特殊な存在であることが示唆されているのである。



写真2 不良<sup>(53)</sup>

このようなコメントは確かに、若者一般の行動を、「不良」のそれと同一視して、過度に問題視してはならないとラジオ聴取者に伝えるものではある。だがコメントは同時に、職業について家事をおろそかにする母親の「誤った男女同権理解」も「不良」の行動の

原因となっているとしている<sup>(54)</sup>。非難されているのは「不良」の行動ではなく、母親の就労なのである。以上のことから分かるように、こうした報道は「不良」の問題にこと寄せて、伝統的家族観、性差役割分業論を繰り返し、それが社会的な現実となることを意図しているのである。

だが、こうした伝統的な観念を離れてみれば、「不良」についての別の側面が見えてくる。「不良」には労働者階級出身が多かったとはいえ<sup>(55)</sup>、必ずしも労働者ばかりではなかった。彼らはM.ブランドを真似て革ジャンパーにジーンズとTシャツを着て、オートバイを乗り回し、ある時は暴力行為を繰り返し広げた。特に交通規制を行う警察官との衝突が注目を集めた。そうすることで彼らは一方で「男性」性の発露を求めたのである。「不良」のなかに労働者階級出身者がいた限りで、そこには街頭での行動に、また肉体的な力に「男性」性の証をみていた19世紀以来の労働者文化の名残をみることもできるだろう。このように理解するならば、「不良」が体现しているのは工業社会から消費社会への転換期における労働者文化と消費文化との二重性であると言うこともできるであろう。他方では、若者たちの暴力行為は、最早力を失いかけているにもかかわらず、今なお抑圧的な父親への反抗という意味を含んでいた。あるいはそれが叶わぬまでも、ブランド主演の映画を見ることで、若者たちは想像の中での反抗者となったのである。

注意すべきは、親（世代）に対するこうした反抗が、男性も「経済の奇跡」に与ることではじめて「一家の大黒柱」たり得るような、戦後社会への反発を含んでいたことである。既に繰り返し述べたように、「経済の奇跡」の中で目指された家庭は「アメリカ」的な、耐久消費財に囲まれたそれであったが、その実現のためにはしばしば「今このとき」の消費を抑えるような「節約」を旨とするような消費行動をとらなければならなかった。1950年代末になってもまだ、ドイツ人の消費性向の中では「節約」が割賦販売を上回っていたから<sup>(56)</sup>、人々にとって「将来のために」節約をすることは決して特別

のことではなかった。しかし、それは「今このとき」ジーンズ、Tシャツ、バイクを求める若者たちの気持ちとは相容れないものであった。そしてこの若い男性たちの恋人も、抑圧的な家庭<sup>(57)</sup>から、特に消費を抑える母親からの解放の可能性を映画の中に、あるいは、実際に「不良」グループにはいることは少なかったとはいえ<sup>(58)</sup>、グループの中に見いだしていたのである。1950年に生産が始まったナイロン・ストッキング1足の値段は、4人家族の標準的労働者の月収の2.5%にも達していたから、母親が娘に対してストッキングの購入を押さえようとするのは当然ではあったが<sup>(59)</sup>、それに娘が反発することもまた当然であっただろう<sup>(60)</sup>。

以上のことは、1950年代後半のドイツにおいて、消費生活にかかわる部分で「アメリカ」についてのイメージとそれに関連する行動の面に関して、世代間に大きな相違があったことを示しているだろう。すなわち、一方には家庭での耐久消費財の充実に「アメリカ」的な生活の実現を見、そのために将来に向けた「節約」的消費行動をとろうとする親世代があり、他方には、今の自分の欲求充足のための商品購入に「アメリカ」的なスタイルを見だし、今の消費行動を最優先する若者世代があったのである。勿論、若い労働者が通勤のためにオートバイを購入しようとするとき、彼が節約をしなればならなかったことは明かであり、その点では若者と親世代の間に違いはなかった。だが、ストッキングやTシャツのようなより安価なものとなったとき、両者の違いがはっきりと現れたのである。そしてこの違いは、消費が必要なものから欲しいものの購入一費消へと変化しはじめていることを示していた。

消費行動にあらわれた世代的な差異はまた、ドイツの伝統的な人間像が揺らぎ始めていることをも示していた。「今」の消費を「節約」する事ができることは、とりもなおさず、自己管理能力のあることを意味していたが、それはまた規律に従う兵士的人間像とも合致するところが少なくはなかった。



「節約」が美德であった所以である。「不良」に代表される若者はそうした自己管理能力のある兵士的な人間像が崩れていく事態を象徴していたのである。このように考えるならば、「不良」現象に対して何故親世代が激しく反発したのかも理解できるであろう。また、かつて暴力に密接に関わる形で「男性」性が表されるとき、それは軍事的な規律と一体化していたが、「不良」の場合には、——当時しばしばなされた東ドイツ側からの主張<sup>(61)</sup>とは裏腹に——最早そのようなことはなかった。先に戦争映画や「郷土映画」を例に示したように、若者は規律に関しては、そこに軍事的な価値の優越を感じ、それ故に胡散臭さ、拒否感をもっていたのであるが、「不良」の場合にもそのことは例外ではなかったのである。彼らは暴力という点に「男性」性を見いだしながらも、軍隊的規律の中には最早「男性」性をみてはいなかった。ここには「男性」性が今や安定的な観念ではないことが現れている。

「不良」に代表されるような若者たちは、一方では暴力性を前面に押し出すことで、他方では過去から今日までを貫いている価値—規律への否定を示すことで、「経済の奇跡」の中で「過去の罪責」を不問に付してきた戦後西ドイツ社会に対して——彼ら自身はそれに気づくこともないままに——「過去の罪責」から逃れることは出来ないことを、見誤りようもなくはっきりと突きつけたのである。人々は、伝統的な価値である規律を拒否する若者たちがむき出しの暴力を行使するのを見たとき、かつてナチスのいわれのない暴力が誰に対してふるわれたのか、そして規律の名の下にそれに加担したのが誰であったのかを、考えることを余儀なくされた。もちろん、このことが現実の社会的過程として表面化するのは、1960年代後半以降のことであり、今我々が扱っている時期のことではない。だが、1950年代後半は「過去の罪責」に関して一見したところ「平穏な時代」でありながら、その実、内部においてマグマの温度が上昇してきた時期であったのである。小説や映画の世界ではすでにそのことが表面に現れてき始めたことについては、先に述べ

たところである。

ところで、本稿でこれまで述べたようなアメリカ映画が滔々と流れ込んでくると期を同じくして、「郷土映画」に代表されるようなドイツ映画は急速にその人気を失った。映画を通じてドイツにアメリカ文化が急速に流れ込んできたと言えるだろう。しかし、この現象をドイツ人が「ドイツ的なもの」(＝郷土映画)を振り払い、そのナショナル・アイデンティティを失っていく過程と見ることは妥当であろうか。本節でこれまで述べてきたことからすれば、否である。何故なら、映画を通じたアメリカ文化の流入は、同時にまた——先に「不良」の暴力に関連して述べたように——ドイツ人が自らの過去から目をふさぐことが出来ないという現実をも明るみに出しているからである。人々がそうした現実を現実として意識するようになると、そこに改めてドイツのナショナル・アイデンティティの問題が浮上してくるはずである。つまり、「アメリカ化」ということは、必ずしも、ドイツのナショナル・アイデンティティを否定するような一方的な過程ではなかったのである。

### 3. エルヴィス・プレスリー——ジェンダー秩序と社会的階層秩序の乱れ——

1950年代後半の若者文化で欠かせないのが、エルヴィス・プレスリーとロックン・ロールの爆発的な流行であった。このアメリカ南部の極貧家庭に生まれ育った若者が戦後世界に与えた衝撃には計り知れないものがあったが、その一つの表れがジェンダー秩序の乱れであった。ドイツにおいてプレスリーやビル・ヘイリーのロックン・ロールを最初に受け入れたのは、『乱暴者』に歓喜したのと同じ階層、つまり労働者や下層中間層に属する若者であったと言われる<sup>(62)</sup>。K. マーゼによれば、「不良」たちはロックン・ロールを、例えば映画『乱暴者』に対する場合と同じく、年長世代への抵抗と、非労働者世界と自己のミリューとの区分の象徴として受け止めていた<sup>(63)</sup>。だが、プレスリーについて言えば、1956年の末にドイツで2枚のレコードが発売され

たとき、すでにその販売状況の中には「若者の反抗」という兆候は見えなかったと『シュピーゲル』誌は伝えていた<sup>(64)</sup>。ここにはおそらく、プレスリーファンと「不良」との間に社会的な差異があったことが現れていた。「不良」の中には女性は少なかったが、プレスリーに熱狂したのは圧倒的に女性であったのである。プレスリーファンの多くが女性であったことの一つの理由は、恐らくプレスリーの場合には、彼が女性的なイメージをかき立てていたこと、また彼には「不良」に見られた暴力性が欠落していたことが挙げられよう<sup>(65)</sup>。

あからさまに性的なイメージを惹起するプレスリーの歌い方——「ペルヴィス」(pelvis, 骨盤)というアメリカで用いられた揶揄的表現は、ドイツでもそのまま受け入れられた<sup>(66)</sup>——に若い女性が熱狂することに対しては、当然、親の世代からの激しい反発があった。その際にしばしば、プレスリーには黒人の血が流れているとか、ロックは黒人音楽であるとか、あるいはユダヤ人が作ったものであるというような、ナチス時代になされたジャズの排撃論と変わらぬ人種主義的な議論がまかり通ったと言われる<sup>(67)</sup>。こうした議論は必ずしもドイツに限られるものではなく、アメリカでも同様の議論は少なくなかったが、ドイツの場合にはそこに特別の意味があった。つまり、それは50年代の「過去の克服」が如何に政治の表層に止まるものであるかを、如実に示していたのである。言い換えれば、議会制民主主義に「なれさせる」という点に「過去の克服」を収斂させようとする、アデナウアーのやり方がもっていた問題点が明るみに出されたのである。人々はアデナウアー政権の下での過去との和解の中で、安んじて様々な偏見、とりわけ人種主義的なそれを持ち続けることが出来た。もっとも、1957年にそれまでのプレスリーの曲とは全く異なるバラード『ラブミー・テンダー』が大ヒットし、ファン層が労働者階級から、中・上層市民層の女子にまで広がった結果、こうした議論は急速にその力を失った<sup>(68)</sup>。このことはプレスリーに関わる人種主義的な議論が、下層の社会層を対象になされていたことを示している。

だが、そうなってから逆に大きな問題となったのが、プレスリー、あるいはロックン・ロールによって引き起こされたジェンダー秩序の揺らぎであった。ロックン・ロールが流行し、「不良」の存在がマスコミを通じて大きく取り上げられるようになると、当然のことながら、「享楽に身を任せている若者たちの愚連隊」<sup>(69)</sup>に自分の子供たちが引きつけられるのではないかという不安に親世代は捉えられた。若者の余暇活動を規制しようとした前述の政府の試みも、このような事情を背景としていた。とはいえ若者を統制し、秩序化しようとする試みは権力だけによってなされたのではない。ロックン・ロールの流行に期を合わせるかのように「流行」したのが、ダンス教室、ダンスパーティであった。「時々は親も一緒に参加し、若者たちが正しい道に踏みとどまれるように助ける」<sup>(70)</sup>この試みは、若者にとっては——当時を回想した女性の言葉によれば——「拷問」にも等しいものであった<sup>(71)</sup>。何故そうであったかは、ロックン・ロールとそうしたパーティで踊られる社交ダンスを比べてみれば明かであろう。中・上層市民層に広がる以前から、ロックン・ロールの踊りが「きちんとした」社交ダンスのような踊りと本質的に異なるものであることは注目されていた。すなわち後者にあっては、男性が女性をリードするということは男女の主従関係が揺るぎないことを意味していた。同時に社交ダンスは、踊り手である男女が一定の距離を保つことができるような自己規律、自己管理の能力を有していることを、目に見える形で示す踊りでもあった。とりわけ男性の場合、すでに述べたように、そうした自己管理能力は規律に従う兵士的な能力と同一視され、「男性」性の現れと見なされた。

ロックン・ロール(写真3)の場合、社交ダンスにみられるような男女の間の主従関係、役割区分は完全に崩れていた。女性が男性を床面上どころか、空中に向けて回転させることさえもあったからである。それどころか、女性たちはジーンズ、あるいは7分のパンツをはくなど、服装の面でも男性化し

ていた。それはまた服装面で  
の階層差が失われ始めている  
ことのしるしでもあった。

こうしたことを前提として、  
今、プレスリーやロックン・  
ロールが階層の如何を問わず、  
若い女性の間に熱狂を引き起  
こしていくとき、階層秩序ば



かりではなく、「きちんとし  
写真3 ハンブルクのロックン・ロールコンテスト<sup>(72)</sup>  
た」、「正しい」男女の関係が崩れ、それに伴って性の規範も崩れていくの  
ではないかという危惧の念が中産階級の親世代を中心に広がることになった<sup>(73)</sup>。  
例えば婦人雑誌の中では、ジーンズをはじめとする十代の新しいファッショ  
ンを十代の女性たちの性行動と結びつける議論がみられ、そこにおいてはモー  
ド産業が若い女性の性行動を煽っていると非難されたのである<sup>(74)</sup>。ここには  
十代のファッションの問題が経済に関わる世代間の軋轢の問題であるばかり  
ではなく、性規範の問題でもあったことが窺える。このような議論が広がっ  
たことは一方では、「女性」性を結婚と母親の領域へと収斂させることによっ  
て家族を戦後社会再建の基礎としようとしてきた企図が脅かされていると、  
中産階級の親世代が感じていたことを意味していた。他方ではまた、戦争と  
戦後という例外状態——そこでは当然、性の規範も動揺せざるを得なかった  
——からようやくにして伝統的な行動規律への復帰を果たし、あたかも「過  
去の罪責」などなかったかのように過ごそうとする親世代の努力を、ロック  
ン・ロールとそれに関わる若い女性の行動が根底から否定するように見えた  
のである<sup>(75)</sup>。このようにロックン・ロールの流行、エルヴィス・プレスリー  
への若者、特に女性の熱狂という事態の中に浮びあがってきたジェンダー秩  
序の混乱は、戦後の西ドイツにあっては同時に、「過去の罪責」という問題

をも浮上させる危険性を含んでいたのである。この点はロックン・ロールの流行という世界的な現象におけるドイツの特徴、あるいは「アメリカ化」のドイツ的変容とみることができるだろう。

歴史的に見るならば、ロックン・ロールに見られるようなダンスの型、服装のありよう、男女の関係等々に現れた形式の崩れは、ヴァイマル時代にアメリカの影響下に、例えばスウィングが流行ったとき、既にその原型が現れていた。つまり、ヴァイマル時代も戦後も、アメリカの影響下に拡大した大衆文化の中で、文化的規範や型が崩れたのである。特にプレスリーへの熱狂が中・上層市民の女子にまで一気に拡大したことは、大衆消費社会が社会階層の相違を少なくとも表面的には消し去ってしまうこと、その限りでは社会の「平準化」を強力に推し進めることを端的に示していた。他方、戦後ドイツでは、大衆文化や大衆消費社会に特有のこうした規範や型の崩れの中で、ナチ支配とその下での罪過を「事故」として片づけ、経済の再建と発展と共に旧来の規範や型をも再建しようとする親世代＝ナチズム世代と、それに反発する若い世代の矛盾が広がったのである。もちろん、このことが実際にどこまで事実在即していたかは、詳細な検討が必要ではあるが、68年以降の状況が早くもここに先取りの現れていたことは否定できないだろう。

これまで見てきたようにアデナウアー時代の西ドイツは、政治的な面では、ナチズムにまつわる過去を可能な限り封印してきた。その一方で、経済的には、「経済の奇跡」の中で人々の関心を消費生活の向上へと誘導しつつ、社会的には、伝統的規律や規範の回復、伝統的な権威主義的家族の再建によって、社会的な安定を維持することが試みられた。こうした中で「経済の奇跡」は若い世代が独自の消費行動を起こすことをも可能にした。映画やロックン・ロール、ファッション、オートバイ等々はその見やすい現れである。それらはしばしば若者へのアメリカの影響、「アメリカ化」の現れと見なされた。重要なことは、若者がその消費行動の中で、アデナウアー政権の下で回復が

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

試みられた伝統的な規範や、権威主義的家族への反発を示したことである。それは若者の間での規範意識のゆるみ、権威主義的な姿勢の後退を引き起こしつつ、一層のこと若者固有の消費文化を形成していったから、その限りでは「経済の奇跡」を後押しするものでもあった。他方、ドイツ史の文脈の中で見れば、規範意識のゆるみは早晩、ナチズ的な過去を封印したままできた親世代と、若い世代との対立が先鋭化させることになることは避けられず、ここに60年代後半以降の西ドイツにおける政治文化変容の根が形成されたと言えるだろう。そのことはまた、アメリカの影響が一方的なもの、言わば「文化植民地」化というような過程として現れるのではなく、ドイツが抱える問題との邂逅の中で、一定の広がりや形をなすということをも意味しているのである。

### 第3節 「アメリカ化」とナショナル・アイデンティティ

最後に、「経済の奇跡」の中で現れた戦後西ドイツにおける消費文化の発展、とりわけ恰も「アメリカ化」と呼ぶことのできたような若者の間でのそれは、はたしてドイツの伝統に根ざしたアイデンティティを否定することになるのかという問題についての簡単な見取り図を、1960年代末の学生運動をも視野に入れながら示しておこう。

1968年の学生運動<sup>(76)</sup>はしばしば西ドイツ社会を決定的に西ヨーロッパ社会化したといわれる。すなわちそれは、主として50年代に再建—確立された社会、つまり階級的であり、ヒエラルヒッシュな社会秩序を持つ工業社会から、より多元的な価値に立脚し個人の解放を実現している新しい社会への転換を促進する上での、主たる役割を担ったというのである。この新しい社会の一つの側面が消費社会の形成であったが、それは西ドイツにあっては——そして他の西ヨーロッパ諸国においても——アメリカ的な消費文化の強

い影響下に進展した。このことは、第1節で述べたように、西ドイツ社会の「西欧化」は「アメリカ化」を通じて実現したということである。他方1960年代末以降、ドイツの「過去の克服」をめぐる議論が大きく変化した。学生運動はナチズムの下での親世代の行動を問うことによって、その重要なきっかけを作った。いうまでもなく、「過去の克服」は西ドイツがその反民主主義的な過去を清算して西ヨーロッパの「普通の国」となるための必須条件であった。言い換えれば、西ドイツ社会は「過去の克服」を通じて、民主主義的な価値を他の西ヨーロッパ諸国と共有しようということである。それでは、西ドイツが「アメリカ化」を通じて工業社会から消費社会に転換することと、「過去の克服」を通じて西欧的な民主的国家となるということとは、どのように関連しあっているのだろうか。

階級的・工業的社会の重要な特徴の一つは社会の内部に生じる新しい問題に柔軟に対応し得ないことにある。例えば、我々がこれまで見てきたように、1950年代の西ドイツでは急速な経済発展の中で表面化した行動規範、秩序観等をめぐる世代間の対立は、結局内向し、解決を見ないままであった。60年代末の学生運動が西ドイツ社会を開かれた西欧的社会へと転換させる触媒となったとするならば、それはまさに、この運動がここに述べたような社会的閉塞状況を打ち破ったことによっていた、ということになるだろう。他方、消費生活の面でいえば、「経済の奇跡」が始まった1950年代にはまだ「アメリカ」的（と思われた）消費生活に対する行動様式の相違、2つの消費スタイルの相違として世代間の対立は現れた。しかし「経済の奇跡」の中で、世代の如何を問わず、「節約」を旨とする行動様式から「今ここで」の消費を重視する行動様式へと次第に変化していった。つまり消費生活面でのこの転換は、学生運動のような大規模な社会運動の介在なしに実現していたのである。学生運動は工業社会から消費社会への転換が進展していく中で、その転換を基礎にしながら社会の——消費行動とは異なる面での——秩序観の転換



## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

を引き起こす触媒となったといえるだろう。

それではこのように消費社会化を基礎にした秩序観の転換の結果として西ドイツ社会が新しい社会に変わり、またその中で「過去の克服」を果しつつ「西欧化」していくことは、この社会が有していた固有の特徴を失い、いわば「アメリカ」の鏡像となったり、他と異なるところのない「西欧」の一国になるということであろうか。

### 1. 映画『ベルンの奇蹟』

2003年に公開されたドイツ映画『ベルンの奇蹟』（監督 S. ヴォルトマン）はこのことを考える上で、興味深い視点を提示してくれる<sup>(77)</sup>。「ベルンの奇蹟」とは1954年のワールド・カップ・サッカー、ベルン大会で西ドイツが優勝したことをさすが、映画はこのことを背景にルール地方のある一家の少年と父の関係を描いている。1943年生まれの少年はまさに68年世代となる。従って、この映画を通して少年の精神世界を見るとき、68年世代が一体何を負いながら60年代後半の運動に関わっていったのかについての、ある仮説を立てることが出来るように思う。こうした観点から、映画『ベルンの奇蹟』を見てみよう<sup>(78)</sup>。

主人公の父親は1954年に抑留先のソ連からようやく帰還するが、それは出征から数えて12年目の帰還であった。多くの帰還兵がそうであったように、ふぬけ同然であり、戦後世界に適応することが全く出来ない。既に若者となっている長男や長女はそれぞれの世界を持ち、父親は初めて見る末っ子（＝主人公）にどのように関わったらよいのかさえも分からない。彼に出来るのは、戦前の父親がそうであったように、権威主義的、暴力的に息子や娘に向き合うことだけであった。長男は父親との衝突の果てに、自由青年同盟（FDJ）のメンバーとして東ドイツ（DDR）に自らの将来を託すことになる。他方、16歳になる長女はアメリカのGIと踊ることに喜びを見いだしている。

兄妹のこうした行動をつうじて映画は、1950年代半ばに、東西に分裂したドイツのいずれの側に将来性があるのかということについて、普通の国民の間では決して定かではなかったということを述べているのである。実際、「経済の奇跡」が人々の生活の中に浸透し、生活のゆとりが実感されるようになるのは1950年代も終わりの方であり、それまでのBRDは未だ「欠乏の社会」であったのである<sup>(79)</sup>。さて、戦後社会に適合できない父親がよかれと思って家族のためになした唯一のことは、ある日家族のために肉の沢山はいったシチューとプレゼントを用意することであった。だが、そのもとになったのは、末の息子の飼っているウサギだった！ それは、まさに家庭の中、戦後世界の中には彼の居場所は存在しないことを、否応なしに彼にも悟らせる出来事であった。映画はここから、償いをしようとする父親が末息子をベルンのワールドカップへ連れて行くことで、父親と末息子の和解がなり、ハッピーエンドを迎えることになる<sup>(80)</sup>。

## 2. あるべき家庭の秩序と子の反抗

ここで大事なことは、ショックを受けた息子にはそのショックを癒すような父親が必要であるということと、父親はそれに応えることのできる存在でなければならないということである。この2つの条件があって初めて、壊れた親子の関係はあるべき関係として再建されるのである。このことは一見したところ、親子関係再建の鍵が父親にあることを意味している。だが実際には、息子の傷は癒されねばならず——そしてそれは親の望むところである——まさにそれ故に、関係再建の鍵は父親ではなく息子にある。このことをアデナウアー時代の社会秩序の再建と重ねて考えるならば、社会の基礎的単位としての家庭の再建は、実は夫婦にではなく親子の関係、特に子供にかかっているということになるだろう。言い換えれば、父親ないしは親の期待に子供がどこまで応えることができるかが重要なのである。そのことの意味は、

あるべき親子関係が形成されるとき、つまりあるべき役割を子供が果たするとき、親子関係だけではなく、家庭の秩序も維持されるということである。まさにそうであるが故に、50年代の「不良」現象やロックン・ロールの流行はあるべき関係を壊し、もって社会秩序を脅かす現象であると、例えば婦人雑誌などによって捉えられたのである。あるいは徴兵制の導入が若者に対する規律化の手段として捉えられたり、アメリカ映画の流行に対して少年保護法の改正が企てられたのも、家庭の秩序の核心が子供の側にあるという理解が社会的に広がっていたことを示すものである。あるべき子供、親子関係、家庭の秩序が存在することは、例えば女子ならば、母親の家事の手伝いをすることであり、男子ならば写真4<sup>(81)</sup>（「日曜大工する父と息子」）のように父親の日曜大工の手伝いをするような、性差役割分業を基礎とするジェンダー秩序に従いながら、子供たちが家庭内で社会化されていくことを意味していた。

ジェンダー秩序に従うことに加えて、家庭内での社会化に関連して重要であったのは、50年代から60年代の「経済の奇跡」の中で主婦の発言力が高まり、それにあわせて、家庭内や近隣との交流関係の中から政治を排除する傾向が顕著になったことである<sup>(82)</sup>。それこそはアデナウアー流の宰相民主主義を根底で支えている精神的潮流であった。1957年のCDUの選挙スローガン「実験をやめよう」はまさに政治を議会内部へと極小化してしまうことを意味していた。人々を民主主義に「慣れさせる」ことは、このように政治を極小化することによって初めて可能になったのである。



写真4 日曜大工する父と息子

確かに、このような一見したところ脱政治的でありながら、その内実において保守的な傾向は「経済の奇跡」に均霑し、「アメリカ的な生活」を実現していくための条件と見えた。だが他面では、そうした保守的傾向の下で民主主義に「なれる」ことは「過去の克服」をなおざりにし、権威主義的な秩序を社会に、そしてまた家庭内に残すことにもなっていた。このことに関連して M. ヴィルトは、ひとびとが「経済の奇跡」の中で民主主義国家の住民になったとしても、それは決して自ら民主主義のために戦った結果ではなく、まさに「経済の奇跡」の結果に過ぎなかったとして、経済発展が結果的に西ドイツ国民を民主主義者としたことを鋭く指摘していた。言い換えれば、「アメリカ化」あるいは「西欧化」の重要な側面である民主化は、「経済の奇跡」の中では達成されていなかったのである<sup>(83)</sup>。社会全体としてみるならば、この状態がもたらした閉塞状況は 1966 年に元ナチ党員の G. キージンガーを首班とするキリスト教民主同盟と社会民主党による大連合内閣が成立したときに頂点に達したであろう。民主化に向けた社会の転換は大連合内閣に続くブランド政権が「より大きな民主主義を」と唱え、また学生運動が展開していく中で——それらへの反発との厳しい対決を含めて——はじめて果されることになるのである。

戦後ドイツ社会の中ではあるべき親子関係とは、子供にとっては一定の年齢に達した後に——主としていわゆる完全家族の場合について言えることであったとはいえ——親の定めたルールの上によって、その進路も定まるということの意味していた。それはアデナウアー流の「保守の後見」の下で人々が「経済の奇跡」に均霑するように、親の家父長的、権威主義的な保護の下で子供もまた一層の「豊かな生活」を可能にする道をとることに他ならなかった。いうまでもなく、「経済の奇蹟」が続いていた限り、子供の進路はますます社会的上昇気流に乗る可能性が強まるであろう。20 世紀初め以来、家庭の経済事情が好転するにつれて子供の教育に関心を注ぎ、それを職業選択

に結びつける傾向は一貫してみられたが、1950年代、60年代を通じて社会的上昇気流に子供を乗せようとするとき、親は子供の教育に関心を注ぎ、結果的にそのような歴史的傾向は一層強固になっていたのである。当然のことながら、複数の世代を通じての社会的上昇によって、アメリカ的な「豊かな生活」は一層拡大して行くであろうと考えられていた。

以上のように、1950年代、60年代を通じて子供たちは、「豊かな生活」と保守的・権威主義的志向、伝統的なジェンダー秩序等を含む価値体系に適合することが求められていたのである。その際、50年代、60年代には上昇気流に乗る可能性、傾向は社会的自由の拡大と見られていた。それがもっとも見やすい形で現れたのが商品選択に関わる場面であったことはいうまでもない。しかし、H. ブーデがG. バゼリッツの1963年に発表した作品『だめだった夜』(die grosse Nacht im Eimer)を分析する中で明らかにしているように、実はこの自由は非常に大きな画一化を伴っていたのである。それは若者からみれば、まさに親の敷いたレールに乗る以外に道のないような生活に入ることを意味していた<sup>(84)</sup>。自由の拡大と思われたことが実はただ一つの選択肢しかない閉塞状況であること、「経済の奇跡」が持続する中で若者が直面したのはまさにそうした状況であった。つまり豊かではあるが保守的・権威主義的で、伝統的な秩序観に絡め取られたような生活への道を選択することを、若者たちは迫られていたのである。政治的な面でみれば、大連合内閣の成立によって議会政治においても選択肢が無くなったこと、その意味でアデナウアーが「慣れさせる」ことに腐心してきた議会政治自体も危機に陥っていた。

もちろん、親の定めたレールの上に乗ることは「豊かな生活」を約束するように見えたし、若者にとってもそれを拒否する理由は必ずしもあったわけではない。だが、繰り返して述べてきたように、親世代にとって消費は必要に迫られたものであるか、あるいは「豊かな生活」に達するためにも節約を旨

としなければならなかったのに対して<sup>(85)</sup>、若者たちは親世代の消費行動の果実をすでに当然のこととして享受するか、それを前提とした消費行動をとるようになっていた。このことは既に50年代半ばに若者が「今ここで」欲するものを手に入れようとするようになっていたことのうちに、はっきりと現れていた。そうした傾向は60年代に入ってますます強まることはあっても、弱まることはなかったの言うまでもないだろう。若者にとって、親の敷いたレールに乗るにせよ、消費行動までも親のそれにあわせる必要はどこにもなかったのである。

他方では、ドイツ社会が階級的—工業社会から抜け出していく可能性を次第に濃厚にし始めた60年代後半になると、若者にとっても、自らの前途に親の思い描くのととは必ずしも一致しない様々な可能性が開かれてくるように見えてくる。10歳の少年の頃から戦後社会の再建の要の役割を果たし、今また、消費行動においても、将来の進路や様々な価値体系への適合においても、親の期待する方向へ進む。それは経済的な発展への道ではあり得たとしても、社会的、政治的な面から見れば、アデナウアー以来の「保守的後見」状態が続くということに他ならなかっただろう——68年の運動、68年世代が拒否したのはまさにこのことであった。

### 3. 「アメリカ化」とナショナル・アイデンティティ

このように見れば明らかなように、68年の運動は端的に西ドイツの戦後世界のあり方を否定するものであり、その点で50年代の若者たちがもった親世代への反発を引き継いでいた。「経済の奇跡」の中で人々によって追求された「豊かな社会」が結局のところ、労働者と都市中産階級との間の生活スタイルの差異を見えなくし、社会をいわば「平準化」していくものであったとするならば、H. シスラーが述べているように、68年の運動は確かに親世代の中産階級的な生活スタイルへの反抗、「平準化」された社会への反抗

ということになるだろう<sup>(86)</sup>。だがそもそも、その中産階級的な生活こそ、戦後のドイツ人が「アメリカ」的生活として追求してきたところであった。そうであるならば、1960年代末になってもまだ「アメリカ化」が、かえって若者の間に反発を引き起こしていたことは、「アメリカ」的なもののドイツ社会への浸透力には限界があったといえるだろう。くりかえし述べてきたように、戦後西ドイツの「アメリカ化」は中産階級的生活を実現しようとする親世代の努力を通じてばかりではなく、若者たちの消費行動を通じて進展していたから、「アメリカ化」の限界ということが意味するところは、「アメリカ」的なものを若者が自己のものとするとき、それは選択的になされたということである。例えば、若者が「今ここで」の欲求を満たすような消費行動をとるにしても、そうした行動の仕方はTシャツの購入については可能ではあっても、オートバイについてはほとんど不可能なことであり、それを購入するまでは「節約」という伝統的な消費行動の規範に従わざるを得ないのである。別の例を挙げるならば、ロックン・ロールに惹かれる若者が、権威主義的な家族関係に基礎をおく社会秩序への強い反発を感じたとするならば、それは若者が自分の求めているものをロックン・ロールの中に見いだすことができたということに他ならない。言い換えれば、プレスリーは彼らのアイドルたり得ても、中産階級のスタイルそのままのペリー・コモは決してアイドルにはなれなかったのである。このように考えるならば、我々は「アメリカ化」を「アメリカ」的なもののドイツへの一方的な浸透、つまり「コカ・コロニゼーション」などと単純化することは出来ないだろう<sup>(87)</sup>。

だが他方では、「経済の奇跡」の中で拡大した中産階級的な生活スタイルへの反発であった68年の運動が大規模に展開し得たのは、消費社会化が進行する過程で、まさにそうした生活スタイルの中に含まれていたドイツに伝統的な権威主義的な人間関係、家庭秩序、「節約」を旨とする消費行動からの個人的解放が進んだことの結果に他ならなかった。こうして68年の運動

は、アメリカの圧倒的な影響のもとで進んだドイツの再建と経済発展が、アメリカの影響にも拘らずドイツの伝統を色濃く残したままなされたことのもたらした一つの逆説であり、伝統的秩序と階級的・工業的社会を破壊する重要な梃子となった運動であった。

それでは、消費社会化の進展によって登場してきた伝統的な階級的、工業的社会に代わる新しい社会では、ドイツの固有の特徴は失われることになるのだろうか。これまで述べてきたことから分かるように、アメリカの圧倒的な影響のもとで各国が消費社会化していくとき——これを世界の「アメリカ化」と呼んでも良い——その「アメリカ化」された社会が取り組まねばならない問題は、常にその国独自の問題であった。ドイツの場合でいえば、その一つが伝統的な権威主義的秩序や性差役割分業に基づく家庭内秩序の問題であった。われわれがみてきたように、若者世代は「アメリカ」的なものを我がものとしようとするような消費行動を通じて、そうして伝統的秩序観への反発を示していた。ドイツの「アメリカ化」とは、そうした伝統的・権威主義的な秩序に対立する原理が仮にアメリカに端を発するとしても、権威主義的な秩序との対決を経てドイツの原理ともなることを意味している。それはアメリカの原理のドイツ化と言えるだろう。

くわえて、旧来の秩序観に対決しなければならない理由自体はドイツの歴史に内在していた。権威主義的秩序観や家族観あるいはまた人種主義的な偏見を残したまま、議会政治に「慣れさせる」ことをもって「民主化」に杵をはめようとしても、そのことがかえってドイツにおける「過去の克服」を困難にしていたことは先に見たとおりである。「アメリカ化」がドイツに浸透し、それを通じて西ドイツが他の西欧諸国と同じ「西側」の一国たろうとすると、西ドイツの社会が対決しなければならなかったのは正に、ドイツの過去の罪責に関わるような旧来の秩序観であった。その際、古いものを改革するために、新たな原理を外から機械的に押しつけることが功を奏さないこ



とは、戦後すぐに非ナチ化の名目で行われた、映画や講演その他の手段を使ってドイツを再教育しようとした場合が示している<sup>(88)</sup>。つまり、ある原理をアメリカに発する別の原理に機械的に置き換えることは出来ないのである。これまでみてきたように、「経済の奇跡」の中では権威主義的な秩序への対決は消費行動を巡る世代間の対立を孕みながら展開していった。若者の行動の中に伝統的秩序観や家族のあり方の危機を感じ取った親世代は、伝統的な性差役割分業の観念を強調し、またそれに基づいて若者の将来の進路を規定しようとした。それは強力に進行する「アメリカ化」に対するドイツの反発の現われであった。その限りで、ドイツの「アメリカ化」とはドイツの固有の特徴を排除するものではなかった。だがそうした反発に対する更なる反発が生れる時、つまり、ナショナルな特徴との対立を通して、アメリカに端を発する諸価値を受容していくとき、ある場合には受容する側と送る側との間に価値の共有が生まれ、ある場合には受容する側からの価値の変容を引き起こしながら、それらが全体としての新たなドイツのアイデンティティを形成することになるだろう。こうして「アメリカ化」とはドイツの歴史的伝統に根ざしたこうした反作用を引き起こしながら、ドイツ社会の中に貫徹するのである。その結果として生れる精神の在り方とそれにもとづく行動の仕方を「ナショナル」なアイデンティティと呼ぶのは適当ではないとしても、他の歴史的伝統を有する諸国家、諸民族等と共有しうる価値——それが「西欧的」価値である——を内在化させていく可能性がそこには生まれてくると言えるだろう。

\* 本稿は、第27回ドイツ現代史学会（2004.9.19～20、同志社大学）で行われたシンポジウム『「アメリカ化」、『アメリカニズム』とドイツ現代史研究』で筆者が行った第1報告「第2次世界大戦後の西ドイツにおけるアメリカ化と消費生活の展開」をもとにしたものである。当日のコメンテーターを務められた石井香江日本学術振興会特別研究員をはじめ貴重なご意見を寄せられた多くの学会員に感謝

する。また本稿の一部は、斎藤哲、八林秀一、鎗田英三編『20世紀ドイツの光と影——歴史からみた経済と社会』（芦書房、2005）第23章と重なっている。

《注》

- (1) マーシャル・プランが西ドイツの再建に及ぼした影響に関する議論については、以下を参照されたい。Hans-Jürgen Schröder (Hg.), *Marshall Plan und Westdeutscher Wiederaufstieg: Positionen-Kontroversen*, Stuttgart 1990.
- (2) 「アメリカ化」、「アメリカニズム」と並んで「インターナショナル」あるいは、今日ならば「グローバル化」などという言葉が使われるのは周知の通りである。これらの言葉の間にどのような異同があるのかということ自体、アメリカの影響力の深さと広がりを示すものとして、非常に興味のある問題ではあるが、ここでは取り上げることができない。
- (3) Anselm Doering-Manteuffel, *Deutsche Zeitgeschichte nach 1945. Entwicklung und Problemlagen der historischen Forschung zur Nachkriegszeit*, in: *Vierteljahreshefte für Zeitgeschichte*, 1983, H. 1, S. 10; ders., *Dimension von Amerikanisierung in der deutschen Gesellschaft*, in: *Archiv für Sozialgeschichte [AfS]* 35, 1995, S. 20ff.
- (4) Kaspar Maase, *BRAVO Amerika. Erkundungen zur Jugendkultur der Bundesrepublik in den fünfziger Jahren*, Hamburg 1992, S. 9-20; ders., „Amerikanisierung der Gesellschaft“. Nationalisierende Deutung von Globalisierungsprozessen? In: Konrad Jarausch, Hannes Siegrist (Hg.), *Amerikanisierung und Sowjetisierung in Deutschland 1945-1970*, Frankfurt a. M., New York 1997, S. 223ff.; A. Doering-Manteuffel, a. a. O., S. 34ff.
- (5) デートレフ・ポイケルト『ワイマル共和国——古典的近代の危機』（小野清美・田村栄子・原田一美訳、名古屋大学出版会、1993）p. 152ff. つまり、ポイケルトの言う「古典的近代の危機」の彼岸にあるのがアメリカということになるろう。
- (6) Alf Lüdtke, Inge MarBolek, Adelheid v. Saldern (Hg.), *Amerikanisierung. Traum und Alptraum in Deutschland des 20. Jahrhunderts*, Stuttgart 1996, S. 7. ここではかつては「古典的近代の危機」の彼岸にあるとされたアメリカが、戦後ドイツが進んでいく先に現れる姿と重ね合わされているのである。
- (7) Arnold Sywottek, *The Americanization of Everyday Life? Early Trends in Consumer and Leisure-Time Behavior*, in: M. Ermarth (ed.), *America and the Shaping of German Society, 1945-1955*, Providence 1993, p. 132ff.
- (8) 電話交換、銀行事務など。

第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

- (9) Vgl., A. Lütke u. a., *Amerikanisierung*, a. a. O., S. 16;
- (10) Ebd., S. 20.
- (11) Gunnar Stollberg, *Die Rationalisierungsdebatte 1908-1933. Freie Gewerkschaften zwischen Mitwirkung und Gegenwehr*, Frankfurt a. M., New York 1981, S. 85ff.
- (12) 西ドイツにおける労働者階級の消滅については, Josef Mooser, *Arbeiterleben in Deutschland 1900-1970. Klassenlagen, Kultur und Politik*, Frankfurt a. M. 1984.
- (13) ヴァイマル時代の「家事の合理化」論については, 拙稿「家事と消費生活——ヴァイマル時代から「経済の奇跡」まで」(明大『政経論叢』71/1-2, 2002, p. 1-50)。
- (14) Vgl., Ursula Nienhaus, Rationalisierung und Amerikanismus in Büros der zwanziger Jahre: Ausgewählte Beispiele, in: A. Lütke u. a. (Hg.), *Amerikanisierung*, a. a. O., S. 78-95.
- (15) Philipp Gassert, Amerikanismus, Antiamerikanismus, Amerikanisierung. Neue Literatur zur Sozial-Wirtschafts-Kulturgeschichte des amerikanischen Einflusses in Deutschland und Europa, in: *AfS* 39, 1999, S. 536; A. Doering-Manteuffel, Dimension von Amerikanisierung, a. a. O., S. 22ff.
- (16) A. Doering-Manteuffel, Deutsche Zeitgeschichte nach 1945, a. a. O., S. 2.
- (17) Ders., *Wie westlich sind die Deutschen? Amerikanisierung und Westernisierung im 20. Jahrhundert*, Göttingen 1999, S. 5-19.
- (18) Axel Schildt, *Zwischen Abendland und Amerika. Studien zur westdeutschen Ideenlandschaft der 50er Jahre*, München 1999.
- (19) ここではこの「新しい社会」を価値的に捉えているのではないことに注意。「新しい社会」の中では利害や欲求の多様化が社会全体の連帯性を破壊していくことも考えられる。
- (20) Konrad Dussel, Amerikanisierung und Postmoderne in der Bundesrepublik, in: *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*, 50, 1999, S. 239; A. Doering-Manteuffel, Westernisierung. Politisch-ideeller und gesellschaftlicher Wandel in der Bundesrepublik bis zum Ende der 60er Jahre, in: Axel Schildt, Detlef Siegfried, Karl Christian Lammers (Hg.), *Dynamische Zeiten. Die 60er Jahre in der beiden deutschen Gesellschaften*, 2. Aufl., Hamburg 2003, S. 340.
- (21) A. Doering-Manteuffel, Dimension von Amerikanisierung, a. a. O., S. 10ff.

- (22) ドイツ歴史学との関連でいえば、1960年代のこうした志向性はいうまでもなく、「ドイツ特有の道」を唱えたヴェーラーら「社会史派」の思想的なバックボーンとなっていた。
- (23) 例えば「東側」に対置する意味での「西側」を強調する傾向の強かったアメリカ的な冷戦の論理に対して、歴史学的次元で考える場合、ドイツの「西欧化」への志向性は——「社会史派」の場合でいえば——ドイツ民主主義の歴史的・構造的な弱点の分析に向かうなど、より「内向き」であると共に、民主主義的な価値の内在化に努めようとする傾向が見られる。
- (24) 代表的研究は、K. Maase (注3) と Ute G. Poiger, *Jazz, Rock, and Rebels. Cold War Politics and American Culture in a Divided Germany*, Berkeley, Los Angeles, London 2000.
- (25) クリストフ・クレスマン『戦後ドイツ史 1945-1955. 二重の建国』石田勇治、木戸衛一訳、未来社、1995, p. 333.
- (26) ここで「過去」と理解されているのは主に、ポイケルトのいう「古典的近代」がもっとも集約的な形で現れていたヴァイマル時代のことである。
- (27) Axel Schildt, Von der Not der Jugend zur Teenager-Kultur: Aufwachsen in den 50er Jahren, in: A. Schildt, A. Sywottek (Hg.), *Modernisierung im Wiederaufbau. Die westdeutsche Gesellschaft der 50er Jahre*, Bonn 1998, S. 344.
- (28) 近年の研究には、「過去」から逃れたいという願望の広がりにもかかわらず、他方では「過去」が人々の意識の底に沈殿していたことを指摘するものがある。ほかならぬ映画に関してそのことを論じているのが次の論文である。Frank Stern, Film in the 1950s. Passing Images of Guilt and Responsibility, in: Hanna Schissler (ed.), *The Miracle Years. A Cultural History of West Germany, 1949-1968*, Princeton, Oxford 2001, pp. 266-280.
- (29) この年にはまた G. グラスの『ブリキの太鼓』が発表されており、過去との不徹底な断絶に対する批判が次第に表にはっきりと現れ始めていたのである。
- (30) 近年のドイツにおけるブームとも言えるナチス時代に関わる映画の出現にも同様の傾向があることについては、拙稿「過去の克服——空襲——「ヒトラー」または歴史の偽造」(明治大学軍縮研究所編、季刊『軍縮地球市民』第4号、2006)を参照されたい。
- (31) 「郷土映画」についてのもっとも包括的研究として次のものがある。Ludwig-Uhland-Institut für Empirische Kulturwissenschaft der Universität Tübingen, *Der Deutsche Heimatfilm. Bildwelten und Weltbilder. Bilder, Texte, Analysen zu 70 Jahren deutscher Filmgeschichte*, Tübingen

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

1989. 1950年代の「郷土映画」を主題とした英語による新しい研究に、Johannes v. Moltke, *No Place Like Home. Locations of Heimat in German Cinema*, Berkelay 2005.

- (32) 今日でもドイツのテレビに、バイエルンやシュヴァルツヴァルトを舞台としたホームドラマが多数登場するのは、かつての「郷土映画」の名残といえるだろう。
- (33) まして、その「郷土」が過去の罪過にまみれていないことを積極的に主張するような内容を持つ「郷土映画」であれば、ますますそれが受け入れられる可能性は高かったはずである。だが、そのような映画『菩提樹』(1958, 原題 Die Trapp Familie) が作られたとき、すでに「郷土映画」の人気は過ぎ去っていたばかりか、ナチス犯罪糾明のための州司法行政中央本部が1958年に設立されたように、わずかばかりではあるが、ドイツの過去の罪過に対するドイツ人自身のまなざしにも変化が生じ始めていた。そのため『菩提樹』は、「郷土映画」としてはこの年第3番目の興行成績を上げていたとはいえ (*Der Spiegel*, Nr. 51 v. 19. 13. 1956, S. 52), おそらく製作者が意図したほどの反響を呼ばなかったようである。むしろ、この映画をリメイクしたアメリカ映画『サウンド・オブ・ミュージック』(R. ワイズ監督, 1965年)の方が、世界中でオーストリアについて、あたかも『菩提樹』に期待されていたような効果を上げたのである。
- (34) *Grün ist die Heide*, Regie, Hans Deppe. 観客総数は2000万人を超えるといわれる。Cf. Anton Kaes, *From Hitler to Heimat. The Return of History as Film*, London 1989, p. 15.
- (35) 実際には必ずしも親世代とは限らない。父親がかけている家庭は多かったから、祖父母の世代が親代わりであることも少なくなかった。そしてこのことを象徴していたのがいうまでもなく「老宰相」K. アデナウアーであった。重要なことは、祖父母の世代も若者もこうした場合、祖父母を言わば親と見なしていたことである。そこでは——容易に想像できるように——祖父母はとりわけ「子供」の教育に気をつかったが、その結果、祖父母の受けた権威主義的な教育スタイルがそのまま戦後にも持続することになった。
- (36) アメリカ兵との接触経験については, Ralf Willett, *The Americanization of Germany, 1945-1949*, London, New York 1989, p. 18.
- (37) Wilfried v. Bredow, Sicherheitspolitische und gesellschaftliche Herausforderungen der Bundeswehr vom Kalten Krieg bis zum Beginn des 21. Jahrhunderts, in: Thomas Ellwein, Evehard Holtmann (Hg.), *50 Jahre Bundesrepublik Deutschland. Rahmenbedingungen-Entwicklungen-Perspektiven*,

Wiesbaden 1999, S. 299-302.

- (38) *Der Spiegel*, H. 29 v. 18. 7. 1956, S. 29-31. この調査は雑誌 *Der Spiegel* の依頼でアレンスバッハの世論研究所が1956年7月に行ったものである。
- (39) *Ratgeber für Haus und Familie* [以下 *Ratgeber*], 1957, S. 670-1.
- (40) *Ratgeber*, 1958, S. 598-9; *Constanze*, Jg. 8, 1955, H. 20, S. 116. Elizabeth Heineman, Complete Families, Half Families, No Families at All: Female-Headed Households and the Reconstruction of the Family in the Early Federal Republic, in: *Central European History*, vol. 29 (1996), no. 1, p. 37, n. 48 によれば、現実にはいわゆる母子家庭の方が母親が子供に対して強い權威を有していた。
- (41) *Constanze*, Jg. 8, 1955, H. 23, S. 98; Vgl., *ibid.*, H. 18, S. 13.
- (42) K. Maase, *BRAVO Amerika*, a. a. O.
- (43) Cf., E. Heineman, *op. cit.*, pp. 22-23.
- (44) 前掲拙稿「家事と消費生活」参照。
- (45) 詳しくは以下を参照。Sibylle Mezer, Eva Schulze, Von Wirtschaftswunder keine Spur. Die ökonomische und soziale Situation alleinstehender Frauen, in: *Hart und Zart. Frauenleben 1920-1970*, 2. Aufl. Berlin 1994, S. 280-6. Vgl., Robert G. Moeller, *Protecting Motherhood*, a. a. O.; S. 128ff.
- (46) Julia S. Angster, The Westernization of the Political Thought of the West German Labor Movement, in: Jan-Werner Müller (ed.), *German Ideologies since 1945. Studies in the Political Thought and Culture of the Bonn Republic*, New York 2003, pp. 76-97.
- (47) Vgl., A. Schildt, Von der Not der Jugend zur Teenager-Kultur: Aufwachsen in den 50er Jahren, in: *Modernisierung im Wiederaufbau*, a. a. O., S. 343.
- (48) Edward Dickinson, *The Politics of German Child Welfare from the Empire to the Federal Republic*, Cambridge 1996, pp. 265-267.
- (49) *Ratgeber*, 1958, S. 772.
- (50) Axel Schildt, *Moderne Zeiten. Freizeit, Massenmedien und „Zeitgeist“ in der Bundesrepublik der 50er Jahre*, Hamburg 1995, S. 176; cf. U. G. Poiger, *Jazz, Rock, and Rebels*, *op. cit.*, p. 79.
- (51) Regierungserklärung und Bundestagsdebatte zur Jugendpolitik; Ergebnisse des Bundesjugendplanes, in: *Deutschland 1949 bis 1999. Archiv der Gegenwart. Bd. 2, Sep. 1953- Okt. 1957*, Sankt Augustin 2000, S. 1823. ( ) 内は引用者。

## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

- (52) Hans H. Muchow, *Sexualreife und Sozialstruktur der Jugend*, Reinbeck bei Hamburg 1959, S. 137.
- (53) *Kanzler, Krisen, Koalitionen*, DVD Edition, 2002.
- (54) Vgl. „Harbstarke meuterten erneut“, 13. Okt. 1956, in:  
<http://www.wdr.de/themen/kultur/rundfunk/wdr/textrundfunk/kultur/halbstarke.html> (12. 4. 2006)
- (55) Siehe, K. Maase, Amerikanisierung von unten, in: A. Lüdtke u. a. (Hg.), *Amerikanisierung*, a. a. O., S. 304.
- (56) Michael Wildt, *Am Beginn der ›Konsumgesellschaft‹. Mangelerfahrung, Lebenshaltung, Wohlstandshoffnung in Westdeutschland in den fünfziger Jahren*, Hamburg 1994, S. 64ff.
- (57) 1960年の婦人雑誌には、夜10時の門限に遅れ、外出禁止の罰を受けることになった16歳の女子が、「家は監獄か」とその不当性を訴えた投書が掲載されていた。興味深いのはそれに対する編集部への回答であった。すなわち、16歳の娘に夜10時までの外出を認めているのは多くの家庭ではないことであり、親の「寛大さ」の表れであるとしたのである。このことは、ヴァイマル時代同様若い女性の外出が親によって管理されていることを指摘したことに等しかったのである。(Ratgeber, 1960, S. 832)
- (58) Gabriele Dietz, Sozialisierung. Halbstarke Mädchen, in: *Hart und Zart*, a. a. O., S. 232-236.
- (59) Erica Carter, Alice in the Consumer Wonderland: West German Case Studies in Gender and Consumer Culture, in: Robert G. Moeller, *West Germany under Construction. Politics, Society, and Culture in the Adenauer Era*, Ann Arbor/Michigan 1997, p. 351-2.
- (60) ナイロン・ストッキングが普及するのは、フリーサイズのもので製造されるようになった1955年からのことであった。
- (61) この点について詳しくは、U. Poiger, *Jazz, Rock and Rebels*, op. cit., p. 91ff.
- (62) K. Maase, *BRAVO Amerika*, a. a. O., S. 101ff.
- (63) Ebd., S. 103.
- (64) *Der Spiegel*, Nr. 50 v. 12. 12. 1956, S. 60.
- (65) U. Poiger, *Jazz, Rock and Rebels*, op. cit., p. 171ff.
- (66) 注56に挙げた『シュピーゲル』のプレスリー特集記事のタイトルは、“Elvis, the Pelvis”である。また、*Der Spiegel*, Nr. 39 v. 26. 9. 1956, のアメリカでのロックン・ロールブームについて報じた記事に載ったプレスリーの写真へのキャプションには「黒人音楽が白くなった」とある (S. 52)。

- (67) U. Poiger, op. cit., p. 173ff.
- (68) なお、『ラブミー・テンダー』によってプレスリーのファン層が拡大・変化したことは、プレスリーがマーロン・ブランドと同様に、最早反抗の象徴ではなくなったということも意味していただろう。
- (69) *Ratgeber*, 1957, S. 572.
- (70) Ebd.
- (71) Helma Sanders-Brahms, *Tanzstunde mit Sartre*, in: *Hart und Zart*, a. a. O., S. 258.
- (72) *Die DEFA Wochenschau – Der Augenzeuge*, Nr. 52 v. 28. 12. 1956, DVD Edition, 2004.
- (73) 婦人雑誌が、「ダンス教室」でさえも性的逸脱の「危険」はあるが、それでも自分たちの息子や娘を「もう少し信用しよう」と言うとき、性規範の崩壊への親世代の不安が如何に大きかったかが窺えるだろう。Vgl., *Ratgeber*, a. a. O.
- (74) *Ratgeber*, 1960, S. 307.
- (75) Cf. U. Poiger, *Jazz, Rock nad Rebels*, op. cit., p. 179ff. ただし、消費産業の後押しによる若者市場の形成や、それと関連する「ドイツのプレスリー」をアイドルとするようなティーン・エイジャー文化の広がりの中で、ジェンダーの規範はある程度まで再建され、ロックン・ロールによるドイツ社会への挑戦は言わば薄められた形で受け入れられていったのである。この現象はいうまでもなくドイツ固有のものではない。それもまた「アメリカ化」の世界性の現れといえよう。
- (76) 68年の学生運動については、井関正久『ドイツを変えた68年運動』（シリーズ・ドイツ現代史Ⅱ）白水社、2005。Claus-Dieter Krohn, *Die westdeutsche Studentenbewegung und das "andere Deutschland"*, in: A. Schildt u. a. (Hg.), *Dynamische Zeiten*, a. a. O., S. 695-718; Heinz Bude, *The German Kriegskinder: origins and impact of the generation of 1968*, in: Mark Roseman (ed.), *Generations in Conflict. Youth revolt and generation formation in Germany 1770-1968*, Cambridge UP 1995, pp. 290-305; Dagmar Herzog, *Post-War Ideologies and the Body Politics of the 1968*, in: J.-W. Mueller (ed.), *German Ideologies since 1945. Studies in the Political Thought and Culture of the Bonn Republic*, New York 2003, pp. 101-116; J.-W. Mueller, *1968 as Event, Milieu, and Ideology*, in: *ibid.*, pp. 117-143.
- (77) この映画については多数の批評があるが、ここではさしあたり一つだけあげておく。Nobert Seitz, „Was symbolisiert das ›Wunder von Bern‹?“ in: *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B26/2004 v. 21. Juni 2004, S. 3-6.



## 第2次世界大戦後の西ドイツにおける「アメリカ化」と消費生活の展開

- (78) 明らかにドイツの「国民的」成功をたたえるこの映画が2003年に大ヒットしたこと自体、そしてまた当時の首相G. シュレーダーが映画に涙したことは、ヨーロッパ統合という否応なしに従来の国家の役割を低下させる事態の進展の中での、ドイツ人の「国民」意識、「国家」意識を考えさせるものとして興味深いものがある。
- (79) A. Sywottek, *The Americanization of Everyday Life?* op. cit., p. 150.
- (80) なお、この映画では主人公の家族の話とともに、複線として若いスポーツ・ジャーナリストとその妻の話が扱われているが、それは1950年代半ばに西ドイツでスポーツ・ジャーナリズムが成立したこと、「経済の奇跡」の中で余暇が拡大しはじめたことを表現していると言えよう。
- (81) *Ratgeber*, 1958, S. 166.
- (82) この問題については、前掲拙稿「家事と消費生活」を参照されたい。
- (83) M. Wildt, *Changes in Consumption as Social Practice in West Germany During the 1950s*, in: Susan Strasser et. al. (eds.), *Getting and Spending. European and American Consumer Societies in the Twentieth Century*, Cambridge 1998, p. 315.
- (84) H. Bude, *The German Kriegskinder*, op. cit., pp. 294-295. なお、R. Willettによれば、西ドイツ社会の画一化は実は西ドイツにとってのモデルとなったアメリカ自体を覆っていた状況でもあった。Cf. R. Willett, op. cit., p. 124.
- (85) ヴィルトの挙げている数字によれば、平均的な労働者家庭でも1950年から63年までの間に月収はほとんど3倍にもなったが、支出はそれに対応するほど急速には拡大せず、1957年でも支出の37%ほどは食費であった。標準的な世帯で、必要なものに対するやむを得ない支出の割合が、欲求に応じて弾力的に支出される分を下回るのはようやく1958年のことなのである。Vgl., M. Wildt, *Am Beginn der Konsumgesellschaft*, a. a. O., S. 60, 66, 378-9 (Tab. 6).
- (86) Hanna Schissler, *Rebels in Search of a Cause*, in: H. Schissler (ed.), *The Miracle Years*, op. cit, p. 461.
- (87) cf., Richard Pelles, *NOT LIKE US. How Europeans Have Loved, Hated, and Transformed American Culture Since World War II*, New York 1997, p. 279ff.
- (88) Ralf Willett, op. cit., p. 28ff. 参照、深川美奈「非ナチ化とドイツ人——バイエルン州アンスバハの非ナチ化政策（1945-1948）」（歴史学研究会編『シリーズ歴史学の現在』第6巻『20世紀のアメリカ体験』青木書店、2001、所収、pp. 67-100）。